青島健太、将来をつかみとる松ヤニの手に感動

学校はいろいろな感動であふれています。スポーツライターの青島健太が学校を訪ね、第3回は浅野中学校・浅野高等学校、ハンドボール部を訪問しました。自らの感激を熱くレポートします。

まっ黒に陽焼けした部員たちが集合する。浅野学園ハンドボール部。中学生79人、高校生20人。

「今日はよろしくお願いします」部を代表して主将の登坂君（高2）。「こちらこそ」私は右手を出して登坂君と握手する。

なんだか手がベタベタする。

「あっ！すみません。練習前なので松ヤニを塗っちゃいました」彼の手には、黒い松ヤニがべったりと塗られていて、私の手をつかまえて離さない。ハンドボールの選手たちは、ボールを投げやすく、そして捕りやすくするために手に松ヤニを塗ってプレーするのだ。

浅野といえば、神奈川県内屈指の進学校。その中にあってハンドボール部は、中学、高校共に関東大会に度々出場している強豪校。文武両道を地でいく活躍を続けている。

おもしろいのは、中学1年生に配られるハンドボール部の勧誘パンフレットだ。冒頭には大きな字でこう書かれている。

〈ハンドボール部に入ると成績が上がる〉

これを作成した、浅野のOBでもある顧問の青木先生が、70％の自信と30％の不安をのぞかせながら言った。

「うちの生徒は、みんな勉強への関心が高いですからね。それに親御さんも、運動部に入るとなると、そこが一番心配なところじゃないですか」

始まった練習。ハンドボール部に入ると本当に成績が上がるのか。そこは直接部員たちに聞いてみることにした。

中学2年、この学年のキャプテン山下君。「成績はまん中くらいです。テストの順位も発表されるので勉強も必死です。でもハンドボールがたのしくて、今はこれが学校生活の中心です」同じく中2の中村君。「宿題も多くて授業についていくのも大変です。成績は、まん中よりちょっと上、いやちょっと下くらいです（笑）。」これまた中2の上村君も自信を持って言い切った。「成績ですか？ちょうどまん中です。」チームで活躍する中学生3人。どうも成績がよくなっている気配がない。（青木先生、大丈夫？）

高校生たちは、どうなんだろうか。

高校1年の森田君。「先輩たちを見ていると、高3までハンドボールをやって東大に行く人がいる。カッコイイなーと思うので、ぼくも東大志望です。」

高2の副将金谷君は、「一橋で社会学系の勉強をしたいと思っています。」同じく高2の副将鈴木君は医学部志望だ。「成績はボチボチですね。でも根拠はないんですが、ハンドボールを引退したら成績がグッと伸びるような気がするんですよ（笑）。ハンドボールは点の取り合い。多少のミスがあっても次のプレーで挽回することができる。だからハンドも勉強も攻撃的にいきたいと思ってます。」

中1からゴールキーパーひと筋の梶村君（高2）は、慶応を狙っている。「昔から先生には大きい（187cm）んだから、下手に動くなといわれています。動くと逆に読まれてゴールされる。シュートを止めた時は最高に気分がいいですね。体にボールが当たって痛いんですけど快感が走る。オレってドMですかね（笑）。受験もじたばたしても仕方がないので、どっしり構えて、止められる問題だけ止めてやるつもりです（笑）。」

主将の登坂君もハンドボールの影響で進路を決めた。「中学3年の時に東大と練習試合をさせてもらって、その時に東大にいこうと決めました。成績ですか？学年で20位以内には入っていると思います。でも、今はまだハンドボールでくらより体力的に優る学校は多いんですが、浅野の戦略と組織力で戦っていきたいと思っています。」

青木先生の恩師でもあり、長らく指導に当たられてきた部長の山田先生は、チーム強化と部風についてこう話してくれた。「最初は仮入部というカタチでハンドボールに親しんでもらいます。その後は段階的なプログラムを組んで生徒たちが自主的に取り組んでいく。高校からハンドボールを始める学校が多い中、我々は中高一貫の環境を生かして、個々の技術と戦略的な理解の深さで、身体的な差を埋めて戦っています。ハンドボールをすると成績が上がるかどうか（笑）。それはやっぱり個人の能力と努力によるところが大きいと思います。ただ6年間ハンドボールに打ち込んだ先輩たちが、目指す大学にどんどん入っていく。その姿を見て、オレもやれるんだと思えるところが、良い伝統になっているんじゃないですかね。」

手に残る松ヤニのべとつき。彼らの練習を見ながら思った。相手のディフェンスをこじあけて単身切り込んでシュートを狙う。止められたらまた次のチャンス。夕方6時の一斉下校。限られた時間の中でどうしたら強くなれるかを考える。時間の効率的活用と、内容の充実。そして日々の練習で身につく体力。ハンドボールでの取り組みを、そのまま学業に向けられれば、成績が上がらないはずがない。彼らにとって浅野でのハンドボールは、目標をつかむための松ヤニになっているのだ。6年間で身につけた松ヤニ的な粘着と思考で、彼らは自分の将来をしっかりとつかもうとする。

蛇足だが、東大ハンドボール部現25人中、5人が浅野出身の選手である。

青島健太
スポーツライター・キャスター
昭和33年（1958）4月7日、新潟県新潟市生まれ。春日部高一慶応大一東芝と進み、昭和60年（1985）ヤクルトスワローズに入団。5年間のプロ野球生活引退後のオフ、半年間の研修の後オーストラリアへ日本語教師として渡り、厳しいプロ野球生活の中で忘れかけていたスポーツをする喜びや、楽しみ方を思い出し、その素晴らしさの伝え手となることを決意し帰国。スポーツライターとして新しい道を歩き始める。現在はあらゆるメディアを通して、スポーツの醍醐味を伝えている。
鹿屋体育大学、流通経済大学、日本医療科学大学　客員教授